

在日コリアン女性の職業選択に関する行動戦略と 初職への入職経路

梁 京 姫

はじめに

1. 性別・人種別職業選択に対する先行研究の検討
2. 研究方法と質的面接者の一般的な属性
3. 在日コリアンの職業選択をめぐる歴史的な動きの検討
4. 在日コリアン女性の職業選択に関する行動戦略と初職への入職経路

ま と め

キーワード：在日コリアン、女性、職業選択、
入職経路

はじめに

本研究は、1970年代後半から1980年代に初職を経験した在日コリアン2-3世女性たちの経験を通して、当時、在日コリアン女性がどのように職業を選択し、いかなる行動戦略で入職したのか、その経路を明らかにすることである⁽¹⁾。

これまで在日コリアンをめぐる諸問題は、在日コリアン自らの地位向上運動とグローバル化、また日本政府の同和政策及び多文化共生政策によって諸分野で大きな改善がみられた。また、あらゆる分野で多様な研究が行われ、その改善の是非についての議論も盛んになってき

た。国籍による就職差別問題においても、1970年代から国籍条項撤廃運動が活発化し、制限はあるものの改善しつつあり、在日コリアンの「職業」をテーマにした研究成果も多数見られる⁽²⁾。しかし、在日コリアンに対する関心が高まる中でエスニック・マイノリティー、そして女性という二重の不利な立場に置かれてきた在日コリアン女性の労働・就労問題は研究の対象として注目されることはなかった⁽³⁾。本稿は、日本社会でエスニック・マイノリティーとして、なおかつ女性として、1970年代後半から1980年代に初職を経験した在日コリアン2-3世女性に焦点をあて、彼女らが職業を選択する際に影響を与えたものは何か。職業選択において自由意思が反映されたか否かなどについて、30人の面接を通して彼女らの行動戦略と初職への入職経路を明らかにしたい。

本稿の構成は以下のとおりである。まず、性別・人種別の職業選択に対する先行研究の検討を行い、本稿の研究方法与面接参加者の一般的な特性を提示する。次に、2次資料を用いて在日コリアンの職業選択に関する社会・歴史的な動きを検討する。そのうえ、在日コリアンミドル女性へのインタビューの中で、職業と関連し

(1) 本稿で使う「在日コリアン」とは、国籍を問わず朝鮮半島で生まれたコリアン、そしてその子孫のことを指す。

(2) 金明秀（a 1995-a）（1995-b）、森木和美（1989年）、成田孝三（1995）など

(3) これまで在日コリアン女性に対する関心は、朝鮮

半島から渡ってきた1世の経験談（かわさきのハルモニ・ハラボジと結ぶ2000人ネットワーク生活史聞き書き・編集委員会、2009年）、そして在日コリアン女性に構造的アンケート調査を行い、それをまとめたもの（反差別国際運動日本委員会、2007年）などがある。

て言及された子供のときの家庭経済事情、親の教育に対する関心とジェンダー・バイアス意識、初職に至った入職経緯などを抽出し、彼女たちの行動戦略と入職への経路を明らかにする。そして最後に、インタビュー内容を総括する。

1. 性別・人種別職業選択に対する先行研究の検討

大沢真理 (1993) は、「日本型福祉社会」を「家族だのみ、大企業本位、男性本位」と考えている。また、日本の企業中心社会については、「男性稼ぎ主型」で家族を基盤としたジェンダー・バイアス構造が広く、かつ深く埋め込まれていると指摘する⁽⁴⁾。つまり、日本社会は壮年男性に対して安定的な雇用と妻子を扶養できる「家族賃金」を保障し、女性には家庭での仕事、つまり、家事、育児、介護などの家族の再生産を担当するように労働市場が厳しく規制されてきた。その結果、多くの研究で指摘されたように、男性と女性の間では職種、職業、職位などで性別分離が行われてきた。日本はOECD加盟国の中でも女性労働力率がもっとも低く、また、年齢別には結婚・子育てによる底を表すM字型の労働力率を見せている。このような状況は在日コリアン1世が生まれた韓国においても同様な有様であり、在日コリアン女性は主流社会である日本社会のシステム、そして韓国社会のシステムを基盤とした在日コリアン・エスニック集団の慣行の影響を強く受けてきたと言えよう。

Gottfredson, L.S. (1981) は、性、人種、社会階級による職業意欲の差異、つまり、女性や少数民族、社会階級の低い青年が社会的評価の低い職業に就くことについて説明した。職業についてのイメージは個人によってそれほど違わないにも関わらず、どの職に就きたいかについ

ては個人によって大きな差がある。これは、職業の選択肢についての知覚が異なっているからであるという。この知覚された職業の選択肢の範囲を、Gottfredson, L.S. は境界 (circumscription) と呼んでいる。境界は自己概念と関連しており、自己概念を形成する上で重要な要因である性、人種、社会階級、能力により境界が形成される。すなわち、子供は自分の性、人種を認識するとともに職業が男性的か女性的かという判断を行うようになり、自分の性に合致するような職業を好む (6～8歳)。自分の社会階級を認識するとともに、種々の職業の社会的評価について理解するようになる。これは、職業が社会階級を決定する大きな要因であるためである。また、自分の能力を認識することになり、社会階級や能力に応じた社会的評価レベルの職業に興味を示すようになる (9～13歳)。さらに、青年期になると興味や価値観が形成され、それらに基づく特定の領域の仕事を先行するようになる (14歳以上)。こうした過程を通じて、個人は自分に適したと思われる職業選択肢に関する境界を持つようになる。しかし、誰でも選択肢の中から希望する職業が見つかるというわけではない。希望の職業につけないときは、妥協 (compromise) が行われる。妥協は、自己概念の中核となる面を残すようにして、周辺にあるものを犠牲にして行われる。すなわち、まず職業に対する興味が犠牲にされ、次に必要であれば職業の社会的評価が犠牲にされる。性は自己概念の中核であるため、もっとも犠牲になりやすく、男性的職業か女性的職業かは職業を選択する際に重要な決定要因となる傾向を持つという⁽⁵⁾。

一方、Astin, H.S. (1984) は、職業選択における性差と、女性や少数民族などの集団全体あるいは個人の就労行動における時代的な変化について説明するため、社会・心理学的モデルを

(4) 大沢真理 (1993)、196頁

(5) Gottfredson, L.S. (1981)、545-579頁。森永康子 (2001)、

6～7頁から再引用。

提唱した。それによると、就労は3つの基本的欲求を満足させるものであり、職業選択は、どのような職業が選択可能であるか、そしてそれが当事者の欲求をどの程度満足させるかという認知 (expectations) に基づいて決定されるという。就労欲求は、働くことで生き残りたいという生存欲求 (survival needs)、働くことで精神的な満足を感じたいという快の欲求 (pleasure needs)、働くことを通して他者のために役立ちたいという貢献欲求 (contribution needs) からなり、これらの欲求には性差はないと考える。就労行動における性差は、職業の選択可能性やいろいろな職業が欲求をどの程度満足させるかについての認知における性差を反映したものであり、この認知は社会化の過程と機会構造 (structure of opportunity) を通して形成されるという。社会化の過程とは、女兒は家の中で人形遊びなど他者を世話する遊びを、男児は戸外で競争的な遊びをすることが多い。手伝いにおいても、女子は母親の家事を手伝い、男児は戸外で父親が機械修理するのを手伝う。このような経験を通して、女性は夫の収入により生存欲求を満足させ、他者を援助することで快の欲求や貢献欲求を満足させようとする。男性は収入を直接得ることで生存欲求を満足させ、問題解決や生産により快の欲求や貢献欲求を満足させようとすることであると説明する。他方、機会構造とは、経済状態、家族形態、労働市場、職業形態などの就労に関する環境要因である。これは、出生率の低下、離婚率の上昇や寿命の延びなどの社会変化に伴い変化する。その変化は、個人の認知に影響を与え、その個人あるいはある集団全体の就労行動の時系列的な変化として現れる。社会化によって獲得される性役割規範が時代によってそれほど大きく変化していないにもかかわらず、女性の就労行

動が時代によって大きく変化しているのは、機会構造の変化がもたらしたものであると説明した⁽⁶⁾。

こうした説明にも関わらず就労行動において、同人種や同性内でも社会環境的要因、個人的な要因によって大きな違いがあり、社会構造的に不平等な位置で経済活動に参加する女性、とりわけ、エスニック・マイノリティー女性の独特な就労経験を包括的に説明することは無理であろう。

女性は職業を選択し、その仕事を遂行するにあたって社会や周辺の人々が期待する伝統的な女性的役割と性差別的な固定観念によって多くの制約を受けてきた。自分の潜在力を実現したい人間としての成長欲求は社会、家庭内の環境によって弱体化され、自己発展のための個人的な努力は妻・母親という役割期待と負担によって抑えられる。さらに、エスニック・マイノリティー女性は人間的な欲求とエスニック集団内における期待役割との間でエスニックとして、また女性としてどのように生きるべきか、どのように行動すべきかについて重大な混乱を引き起こされる。エスニック・マイノリティー女性の行動は、主流社会及びエスニック集団の社会的環境 (景気、労働力需要供給のバランス、女性の就労に関する法的擁護や規制、エスニックに対する認識及び働く女性に対する社会認識、性役割規範など) 個々人の家庭内の環境 (両親の養育態度、家庭の経済的状況など) によって規制される。同じ集団の中で社会的な環境は共通性を持つ。しかし、個人の家庭内の環境にはそれぞれ共通性と特殊性がある。それゆえ、エスニック・マイノリティー女性の就労問題を明らかにするためには社会的な環境は言うまでもなく一人一人の女性がおかれた家庭内の環境も追跡する必要がある。以下では、本稿の研究方

(6) Astin, H.S. (1984) 117-126頁。森永康子 (2001) 9

~10頁から再引用

と質的面接に参加した30人の在日コリアンミドル女性の一般的な特性を分析していく。

2. 研究方法と質的面接者の一般的な属性

本稿は、在日コリアンミドル女性が、かつて職業選択のために行った行動戦略と初職への入職経路を明らかにするために、構造式のアンケート調査と、比較的自由に語られる質的面接調査を行った結果である。調査対象は質的面接の性格上、1年間30名を目標にした。調査地域は関西圏にし、調査期間は2011年2月から2012年3月までと1年間にしたが、1名だけは遅れて2012年の7月に行った⁽⁷⁾。対象は便宜上30代半ばから60代半ばまでの朝鮮半島にツールを持つと自認する在日コリアン2-3世女性にし

た。彼女らの祖父母や父母達が日本に渡り、その子孫として日本に生まれ、日本社会のシステムの中で教育を受けた世代である。面接参加者の選定は、調査メンバーの一人である在日コリアン3世のミドル女性を中心となって、彼女の①職場関係の繋がり、②民族運動関連の繋がり、③親戚、④既面接者の紹介という形で進められた。こうした面接参加者の選定方法には偏向があると考えられるが、質的面接調査においては避けられない限界であろう。

面接参加者の一般的な特性をまとめると表1のとおりである。面接は事前に書いてもらった構造的なアンケート調査を基に自由に語れる雰囲気反構造的に進められた。面接時間は2時間を目標にしたが4-5時間かかる場合も少なくなかった。

表1 質的面接者の一般的な特性

| 事例番号 | 年齢 | 民族教育経験 | 初職入職時の状況 | | | | | 現在国籍 |
|------|----|--------|----------|-----|--------------|--------|----|------|
| | | | 最終学歴 | 名前 | 職業(職位) | 入職経路 | 国籍 | |
| 1 | 65 | なし | 大学 | 本名 | 専門病院(医師) | 大学紹介 | 朝鮮 | 韓国 |
| 2 | 48 | 有り | 高卒 | 通名 | 民族系銀行(行員) | 学校紹介 | 韓国 | 日本 |
| 3 | 49 | 有り | 大学 | 本名 | 韓国系商社(事務) | 学校紹介 | 朝鮮 | 日本 |
| 4 | 49 | 有り | 大学 | 本名 | 地元中小企業(電話営業) | 学校紹介 | 韓国 | 韓国 |
| 5 | 47 | 有り | 高卒 | 本名 | 大阪民団(事務) | 学校紹介 | 韓国 | 韓国 |
| 6 | 53 | 有り | 高卒 | 通名 | 地元中小企業(事務) | 家族紹介 | 朝鮮 | 日本 |
| 7 | 49 | 有り | 短大 | 本名 | 韓国系銀行(行員) | 親戚紹介 | 韓国 | 韓国 |
| 8 | 54 | なし | 大学 | 本名 | 弁護士事務所(弁護士) | 先輩紹介 | 韓国 | 韓国 |
| 9 | 43 | 有り | 大学院 | 本名 | 大学(非常勤講師) | 知人紹介 | 韓国 | 韓国 |
| 10 | 59 | なし | 大学中退 | 本名 | 総連系商工会(事務) | 民族団体紹介 | 韓国 | 韓国 |
| 11 | 48 | なし | 短大 | 本名 | 中企連(事務) | 民族団体紹介 | 韓国 | 韓国 |
| 12 | 45 | なし | 専門学校 | 通名 | 歯科(技工士) | 紹介 | 韓国 | 日本 |
| 13 | 45 | なし | 専門学校 | 日本名 | 歯科(技工士) | 紹介 | 日本 | 日本 |
| 14 | 49 | 有り | 大学 | 本名 | 病院(薬剤師) | 先輩紹介 | 朝鮮 | 韓国 |
| 15 | 50 | 有り | 高卒 | 通名 | 地元中小企業(事務) | 応募 | 朝鮮 | 日本 |
| 16 | 39 | 有り | 短大 | 通名 | 地元中小企業(事務) | 応募 | 朝鮮 | 韓国 |
| 17 | 48 | なし | 高卒 | 通名 | 地元中小企業(事務) | 応募 | 韓国 | 韓国 |
| 18 | 48 | 有り | 専門学校 | 本名 | 病院(看護師) | 問い合わせ | 朝鮮 | 韓国 |
| 19 | 46 | なし | 高卒 | 通名 | 地元中小企業(事務) | 応募 | 韓国 | 韓国 |
| 20 | 41 | なし | 専門学校 | 通名 | 地元中小企業(事務) | 応募 | 韓国 | 韓国 |

(7) 2012年3月までに30人の質的面接を終えたが、一人が70代の女性であったため本稿では70代の女性を外

し、2012年7月に行った(事例1)を加えた。

| | | | | | | | | |
|----|----|----|----|----|--------------|-------|----|----|
| 21 | 54 | なし | 大学 | 本名 | 民族運動団体（指導員） | 運動繋がり | 韓国 | 韓国 |
| 22 | 48 | なし | 大学 | 本名 | 民族運動団体（指導員） | 運動繋がり | 韓国 | 韓国 |
| 23 | 47 | なし | 大学 | 本名 | 民族運動団体（指導員） | 運動繋がり | 韓国 | 韓国 |
| 24 | 57 | 有り | 大学 | 本名 | 朝鮮高校（教師） | 総連決まり | 朝鮮 | 韓国 |
| 25 | 51 | 有り | 高卒 | 本名 | 朝鮮幼稚園（教師） | 総連決まり | 朝鮮 | 韓国 |
| 26 | 60 | 有り | 大学 | 本名 | 朝鮮小学校（教師） | 総連決まり | 韓国 | 韓国 |
| 27 | 40 | 有り | 大学 | 本名 | 朝鮮小学校（非常勤教師） | 総連繋がり | 朝鮮 | 韓国 |
| 28 | 58 | なし | 大学 | 通名 | 自営（塾の講師） | 起業 | 韓国 | 日本 |
| 29 | 54 | なし | 短大 | 本名 | 花嫁修行後結婚 | — | 韓国 | 韓国 |
| 30 | 63 | なし | 大学 | 本名 | 学生結婚 | — | 韓国 | 韓国 |

注) 年齢はインタビュー当時のものである。「入職経路」区分のうち、「民族団体」とは、在日コリアンの地位向上のために活動する団体をいう。「運動繋がり」とは、大学のあるとき、在日コリアン民族系サークルに入って活動した人が在日コリアン民族系運動団体（以下、民族運動団体）とも関連を持って活動したが、大学卒業後に民族運動活動の延長のように民族運動団体に就職したケースである。「総連繋がり」とは、在日本朝鮮人総連合会（以下、総連）傘下の学校に入学した人が卒業後には総連本部の指示に従い、総連系学校に就職したケースである。

在日コリアンといっても国籍はさまざまである。面接参加者の国籍をみると、現在の国籍は韓国籍23人、日本籍7人であるが、初職入職時の国籍をみると、韓国籍19人、朝鮮籍10人、日本籍1人であった。初職入職時と現在の国籍を比べると13人も国籍変更がみられる。その変更を詳しく見ると、朝鮮籍から日本籍へ3人、韓国籍から日本籍へ3人、朝鮮籍から韓国籍へが7人である。とりわけ、朝鮮籍10人すべてが日本籍か、韓国籍に変更している。また、1990年代に入ってから日本政府は特別永住者に対して帰化緩和政策を進めてきたが、本調査の参加者でも6人が日本国籍を取得している。初職入職時の最終学歴をみると、大学院卒1人、大卒13人、大学中退1人、短大4人、専門学校4人、高卒7人と、短大以上が19人と高い学歴を持っている⁽⁸⁾。最終学歴後すぐ入職を経験した人は28人で、二人は結婚か、花嫁修行をしていた。28人の入職経路をみると、①公的機関である学校紹介5人、②個人的紹介7人⁽⁹⁾、③応募およ

び自らの問い合わせ6人、④民族団体の繋がり9人（総連繋がりを含む）⑤起業1人で、大きく5類型化される。初職時に使った名前は28人のうち18人が本名、日本名か通名使用が10人である。日本名を使った人は帰化した日本国籍者である。本名を使った人の職場は専門職か、民族関連の職場が多い。日本人社会の職場に入職した人は通名か、日本名を使用している。とはいえ、民族系の地方銀行に勤めながらも通名を使っているケースもあったが、これは顧客が日本人であることから日本人になじみやすい通名を使ったのではないかと考えられる。民族教育を受けた人は15人でちょうど半分であったが、民族教育の有無と名前との相関関係は一括には言えない。さて、面接参加者の質的分析に入る前に在日コリアンの職業選択をめぐる日本社会の制度的環境と歴史的な動きを検討していきたい。

(8) そのうちの4人は社会に出てから改めて大学院に進学したり留学して、最終学歴を向上させている。

(9) 事例14の薬剤師と、事例12、13の歯科技工士の二人の入職経路は、証言では紹介と言っていないが、薬剤師の場合、当時大学の先輩であった夫が同病院で勤め

ていた点、また歯科技工士の場合には、当時、この職種は労働条件が悪く技工士が不足していた点、また、インタビューの中で「技工士の仕事はいくらでもあった」と言っている点から専門学校で繋がりで初職入職したと判断し、紹介の項目に分類した。

3. 在日コリアンの職業選択をめぐる 歴史的な動きの検討

日本法務省の公式統計によると⁽¹⁰⁾、2011年現在日本に住んでいる外国人数は2,078,508人で、そのうち「韓国・朝鮮籍」は545,401人と全体の26.2%を占めている⁽¹¹⁾。「韓国・朝鮮籍」は2001年に632,405人であったが、10年間に約87,000人が減少している⁽¹²⁾。同期間に日本への帰化者は90,775人で、朝鮮半島にルーツを持つ日本籍者を含むと、日本に住んでいる在日コリアンは日本の全人口の2%に相当する約200万人ともなると言われている⁽¹³⁾。また、2005年度の国勢調査による「韓国・朝鮮」籍の労働力人口は254,840人で、そのうち就業者は225,888人である（雇業者75.0%、自営業主18.5%）。女性労働人口は111,100人であるが、そのうち就業者は99,671人（雇業者76,745人、自営業主11,952人）である。女性雇業者の雇用形態にみると、常用雇用50,722人、臨時雇用19,363人の構成で比較的に常用雇用の割合が高い。在日コリアン女性の職業別の分布をみると、高い順からサービス職24.8%、事務職23.4%、生産工程・労務作業職18.2%、販売職16.9%、専門・技術職9.6%に従事している⁽¹⁴⁾。

前節で、職業選択の際に影響を与える要因として、社会環境的要因と個人的要因があると述べたが、在日コリアン女性にとって社会環境的要因といえ、日本社会の経済的・法的システムであろう。戦後、いろいろな事情によって祖国に帰れなかった多くの「韓国・朝鮮」籍の在日コリアンは日本の厳しい国籍条項によって職業

選択の自由が厳しく制限されてきた。日本社会でよく知られているソフトバンクの孫正義社長は在日コリアン3世であるが、小学校のときに教師を希望していたが、在日コリアンには国籍条項によって公務員にはなれないことを知り、高校を中退しアメリカ留学を決心したという有名な逸話がある⁽¹⁵⁾。1991年には国籍条項が撤廃され外国籍も日本人と同じように教師になることが可能になったが、それには職業選択の自由を求め闘い続けてきた在日コリアンの地位向上運動が大きな一因である。

在日コリアンが職業選択の自由を求め国籍条項撤廃運動を始めたのは1970年代である。在日コリアンの2世3世は日本で生まれ、日本社会のシステムの中で教育を受けてきたにもかかわらず公務員などの職業においては国籍条項によって、また一般企業では閉鎖された人事管理制度によって等、いずれにおいても職業選択への道が厳しく制限されてきた。

ところが、愛知県生まれの在日韓国人2世である朴鐘碩（当時20歳）が、1971年に日本の大企業を相手に就職差別の撤廃を求めて立ちあがった。在日コリアン就職差別裁判として有名な「朴鐘碩日立闘争」である。朴鐘碩は日本の公立高校を卒業し、地元の中小企業にしばらく勤めた後、1970年、新聞広告をみて日立製作所の採用試験を受けるに際して、履歴書の氏名欄に使い慣れた通名を、本籍欄には現住所の愛知県を記入した。採用試験の結果は合格で、会社側から入社書類として戸籍謄本の提出を求められた。彼は会社に「韓国籍なので日本には戸籍謄本がない」と連絡した。すると、会社側から「外国人は雇わない」と一方的に採用取消し通知が

(10) 法務省ホーム・ページ、「登録外国人統計」2012年7月5日アクセス。

(11) 男性248,985人、女性296,416人で女性が47,431人多い。

(12) この数字には最近韓国から移住したニューカマーと植民地時代から居住しているオールドカマーの区別

がないため、どちらが減少したかはわからないが、日本への帰化基準を考慮するとオールドカマーからであると想像できる。

(13) 李洙任（2008）、95頁。

(14) 統計局「平成17年度国勢調査」

(15) 永野慎一郎（2010）、78頁。

送られてきた。彼は「日本人でない」理由とする採用取消しは不当な民族差別であると考え告訴した。裁判は4年間も続いたが、この間に彼の裁判闘争を支援する運動の輪が広がった。その中心になったのが、日韓の若者によって結成された市民運動グループ（「朴君を囲む会」）やキリスト教団体であった。22回に及ぶ公判を経て、1974年6月19日、横浜地裁は、「在日韓国・朝鮮人の日本名使用は解雇理由にはならない」として日立の主張を退け、①解雇の無効、②判決までの未払い賃金の支払い、③慰謝料の支払いなど原告側の請求を認める判決を下した⁽¹⁶⁾。

この事件は、日本社会で常態化していた民族差別に甘んじてきた多くの在日コリアンの目を覚まし、差別に屈しないことの大切さと闘う勇気を与えた。関西でも民族差別と闘う数多くの市民運動グループが生まれた。例えば、1974年8月、大阪で「在阪韓国人の生活を守る会」が発足し、同年10月には、八尾市で在日コリアンの子どもの民族教育と進路保障に取り組む「トッカビ子ども会」がスタート、同年11月には「民族差別と闘う連絡協議会」が結成された。こうした運動の連続線上で1970年代後半には「在日コリアン」に教師、弁護士、公認会計士になる道が開かれた。大阪では、1975年に初の在日コリアン教員が採用された。1977年には、和歌山県出身の金敬得さんが外国籍として初の弁護士となった。1970年代は、在日コリアンにとって就職差別裁判など自らの運動によって市民的権利⁽¹⁷⁾の幅が広がりを見せ始めた時期であった。

一方、こうした運動の広がりにもかかわらず一般の在日コリアンの職業選択は相変わらず厳

しいものであった。1980年度の在日コリアンの就業方法（男性、女性）をみると⁽¹⁸⁾、広告（10.1%、13.5%）、知人紹介（37.1%、48.6%）、親戚紹介（20.2%、8.1%）、学校推薦（6.7%、10.8%）、民族団体（7.9%、13.5%）、職業紹介所（2.2%、N）、家業・その他（9.0%、5.4%）であった。男女とも公的機関の紹介や公募による就業は厳しく、知人か親戚の紹介によって労働市場に進入するケースが多かった。知人紹介による就業では、職業選択の幅に限界があることが簡単に想像できよう。職業を選んだ理由を問う調査では⁽¹⁹⁾、「それしかなかった」45.4%、「知人の紹介」13.4%、「収入がよい」10.9%で多く、「自分に合う」7.6%、「技術を生かす」が3.4%と、職業を好んで選択した割合は非常に低い。在日コリアンが勤める企業の規模は⁽²⁰⁾1-29人規模企業が54.0%で5割を超えている。次いでは、30-499人企業25.8%、500人以上の企業ではわずか5.2%で規模が大きいほど入職が難しい。本稿の面接参加者の場合も初職への入職にあたっては、知り合いか民族団体の繋がりによる紹介がもっとも多く、職種としては地元の中小企業の事務職が多かったが、これは日本の労働市場の閉鎖性によるものであると考えられる。

「エスニシティ・マイノリティ」、「女性」という二重の不利な立場に置かれた在日コリアン女性たちは日本社会の変化の渦中で初職入職のためにどのような経験をしてきたのか。以下では質的面接の内容を通して就労行動戦略とその経路を検討したい。

(16) 1974年6月19日『朝日新聞』

(17) 日本の憲法学でいう自由権、受益権、平等や幸福追求権など

(18) 有効者数126人、在日同胞労働問題事務局調査（1980）

(19) 「高槻の韓国朝鮮人実態調査報告書」より（1983）『マップラム』、40頁

(20) 神奈川県在住韓国・朝鮮人調査、『マップラム』、57頁。

4. 在日コリアン女性の職業選択に関する行動戦略と初職への入職経路

ここでは面接内容の深層分析を行うが、質的面接に参加した在日コリアンミドル女性の初職への経験を専門職、地元の中小企業に入職した人（以下、地元中小企業職）、民族運動団体に入職した人（以下、民族運動団体職）、総連系の学校に入職した人（以下、総連系学校職）の各グループに分けて、それぞれのグループにおける共通性と独自性を見つけ出しその意味を分析する。

そのためにそれぞれの個人的な環境、つまり、①子供のときの家庭経済事情、②親の教育に対する関心とジェンダー意識、そして③職業選択に影響を受けたと思われる証言、④初職入職に至った経路の証言を抽出し、1970年代後半から1980年代における在日コリアン女性の初職入職のための行動戦略及びその経路を明らかにする。

面接参加者には地元中小企業職が多かったが、他の職業グループとの人数バランスと紙面の関係を考慮し、筆者の判断でそれぞれ4人に絞った。深層分析対象者は表2（深層分析面接者の一般的な特性）のように15人を選んだが、事例番号は前節の表1（面接参加者の一般的な特性）との混乱を避けるために同じ事例番号を

使用した。面接参加者の経験をすでに定型化されているイメージに合わせてしまう恐れを避けるためにインタビュー当事者の証言をそのまま使う方法で接近した。証言の抽出においては文字起しを反復的によみ、それぞれのグループにみられる定型的な証言と個別的な経験の両面を抽出した。先の四つの状況に適合しない場合はその部分を省略し、個別特性を取り上げた。参加者の証言をそのまま使う場合、文章の前後の理解を高めるために【 】に筆者が付言した⁽²¹⁾。

深層分析面接者の一般的な特性をみると、年齢は40歳から65歳で25歳の幅がある。婚姻状況については配偶者がいる既婚者は6人、日本人男性と同居中一人、離婚5人、未婚3人で参加者15人のうちシングルが8人で、この年齢層にしては高い。専門職の場合、全員が配偶者のいる既婚者であり、地元中小企業職には同居1人、離婚2人、配偶者がいる既婚者1人で、3人がシングル、民族運動団体職には離婚1人、未婚2人で3人ともシングル、総連系学校職には離婚2人、配偶者いる既婚者1人、未婚1人と3人がシングルであった。専門職以外の職業で初職の経験をもつグループの方がシングルの割合が高かった。また、深層分析参加者15人すべてが職場移動の経験を持っていて、そのうち専門職2人を除いて13人が初職時の職業を変えているが、そうした職業移動に関する分析は次回に譲りたい。

表2 深層分析面接者の一般的な特性

| 事例番号 | 年齢 | 婚姻状況 | 初職入職時の状況 | | | | 現在国籍 | 現・職業 | | |
|------|----|------|----------|----|-------------|----|------|------|------|------|
| | | | 最終学歴 | 名前 | 職業（職位） | 国籍 | | 職業 | 雇用形態 | 職位 |
| 専門職 | | | | | | | | | | |
| 1 | 65 | 既婚 | 大学 | 本名 | 専門病院（医師） | 朝鮮 | 韓国 | 医師 | | 自営 |
| 8 | 54 | 既婚 | 大学 | 本名 | 弁護士事務所（弁護士） | 韓国 | 韓国 | 弁護士 | | 自営 |
| 14 | 49 | 既婚 | 大学 | 本名 | 病院（薬剤師） | 朝鮮 | 韓国 | 会社役員 | | 夫の会社 |
| 28 | 58 | 既婚 | 大学 | 通名 | 自営（塾の講師） | 韓国 | 日本 | 大学教授 | | 正規職 |

(21) インタビュー文の中の「、、」は面接者が話を止めたとき、「・・・」は筆者がインタビューの内容を繋

いだときのしるしである。

| 地元中小企業職 | | | | | | | | | |
|---------|----|----|----|----|---------------|----|----|---------------|---------|
| 6 | 53 | 同居 | 高卒 | 通名 | 地元中小企業 (事務) | 朝鮮 | 日本 | 就活中 | |
| 15 | 50 | 離婚 | 高卒 | 通名 | 地元中小企業 (事務) | 朝鮮 | 日本 | アルバイト (喫茶店) | |
| 17 | 48 | 離婚 | 高卒 | 通名 | 地元中小企業 (事務) | 韓国 | 韓国 | 起業準備中 (料理研究家) | |
| 19 | 46 | 結婚 | 高卒 | 通名 | 地元中小企業 (事務) | 韓国 | 韓国 | 大学 | 非常勤 講師 |
| 民族運動団体職 | | | | | | | | | |
| 21 | 54 | 離婚 | 大学 | 本名 | 民族運動団体 (指導員) | 韓国 | 韓国 | 人権団体 | 正規職 職員 |
| 22 | 48 | 未婚 | 大学 | 本名 | 民族運動団体 (指導員) | 韓国 | 韓国 | 福祉施設 | 正規職 相談員 |
| 23 | 47 | 未婚 | 大学 | 本名 | 民族運動団体 (指導員) | 韓国 | 韓国 | 小学校 | 正規職 教師 |
| 総連系学校職 | | | | | | | | | |
| 24 | 57 | 離婚 | 大学 | 本名 | 朝鮮高校 (教師) | 朝鮮 | 韓国 | フリー | 韓国語講師 |
| 25 | 51 | 結婚 | 高卒 | 本名 | 朝鮮幼稚園 (教師) | 朝鮮 | 韓国 | 整骨院 | 臨時職 受付 |
| 26 | 60 | 離婚 | 大学 | 本名 | 朝鮮小学校 (教師) | 韓国 | 韓国 | フリー | 韓国語講師 |
| 27 | 40 | 未婚 | 大学 | 本名 | 朝鮮小学校 (非常勤講師) | 朝鮮 | 韓国 | フリー | ピアノ講師 |

1) 専門職の証言から見る職業選択に関する行動戦略と初職への入職経路

本稿で専門職として取り上げたのは、医師、弁護士、薬剤師、現・大学教授である。大学教授の場合、初職は塾の講師であったが、それは留学の準備金のためにしばらく営んだものであり、彼女が大学卒業後、在日コリアンを理由として就職できず留学を決心した経緯は示唆に富む。専門職4人の場合、3人は本名で入職したが、(事例28)だけが塾を営むときには通名を使用し、大学に就職してからは本名を使った。現在、彼女は本名で日本国籍を取得し活躍している。本名のまま日本国籍が取れることは日本社会の変化を意味する。

①子どもの頃の家庭経済事情

「(事例1) うちのアボジ【父】は夜中じゅう“機械がもったいない”言うて。1世ってみんなそうですよね。だから、自分は、【従業員が帰ってから】朝まで仕事をするというような、そういうことをずっとやってきたんですけど。私のアボジ【父】は、商才はあったと思うんです。時代から見るとね。そういう鉄の売り買いをしていて、そのあと、小さい鉄工所を始めて、だんだんと大きくしていったという感じですね」。「(事例28) うちの家は、鉄に焦点を当て

たんで、非常にある意味、ラッキーだったんじゃないかなと。うちの父はそこで番頭のような位置になって、その会社は、非常に成長していくんですよ」。

この2人の子どもの頃の家庭の経済状況は、父親が在日産業とも言われる鉄関連事業を営み、また懸命に働いていたので経済的に安定していた。(事例1)は父親の懸命な働き振りを「1世ってみんなそうですよね」と表現し、彼女の意識の中には在日コリアン1世はみんな懸命に働き、子供の教育にはお金を惜しまないというように、民族集団に対するポジティブな意識を持っている。

その一方、「(事例8) 母親がスクラップ屋をしたんです。鉄屋。運転免許を取って。・・・絶対、水商売はイヤやと」。「(事例14)アボジ【父】は小学校やし、オモニ【母】は小学校、まともに行っていない状態で、肉体労働しててんけども、子どもが大学行きたいというのは、すごいびっくりしたみたいで、それやったら応援しようということで、朝高のその当時の英語の先生を家庭教師につけてん」。

(事例8)の場合、2歳か3歳のとき父親を亡くしたが、女学校出身である母親がトラックの運転をするなど男以上の働きで生計を支えた。(事例14)の場合、両親は肉体労働者で、「子

どもが大学行きたいというのは、すごいびっくりしたみたいで、」という証言から、教育に関心が低かったと思われる。しかし、彼女から進学の話聞いて家庭教師をつけるなど経済的支援を惜しまなかった。このグループの子どもの頃の家庭経済事情は、程度の差はあるもの安定していたことが感じ取れる。

②親の教育に対する関心

「(事例1) 教育、みんな在日の1世はそうですけど、教育に関しては、まったくお金を惜しまなかったです。・・・オモニ【母】が、自分は専業主婦をしているけども、女性もこれからは、社会的に仕事をもって、いなければいけないというふうな考え方の人だったので、小さい時から、女の子やからとか、もちろん長女で、私の下に4人いますから、子守りとか、そういうの、しましたけど、女の子やから、こういうことをしないといけないとか、そういう制限は一切なかったですね。」「(事例8) 母親が何としても教育をつけんと生き抜かれへんということで、強烈な思いを持っていて、越境入学という、地域に朝鮮人の子がいっぱい居てる所は勉強があかんと。バスに乗って行ける所を、親戚がそういう所に外国人登録してる人がいたんで、そこに籍を入れさせてもらって、バスに乗って、よその校区の公立の学校に行ったんです。・・・子どもに、勉強することで力を付けてほしいという、執念みたいなものがあったみたいです。」「(事例28) 小学校のときに、うちの父が教育しか差別に打ち勝つ方法はないというふうに思うんですね。自分はまったく教育、受けられなかったんで、教育を受けさせるには、どのような教育を受けさせるべきか、自分で必死に考えるんですよ。それは日本人以上の教育を受けさせると。・・・私が非常にラッキーだったのは、うちの父親が教育機会に関しては、まったく差別をつけなかった。むしろ、長女だ

ったんで、より良い教育を付けてくれた」。

(事例14) の場合は、両親は教育にそれほど関心がなかったが友達の影響を受けて自ら大学への進学を決めた。3人のケースではいずれも両親の教育に対する関心が非常に高い。(事例8) の母親は学校の選考において、また、越境入学をさせるなど子どもの教育に積極的に介入した。今で言う教育ママであっただろう。「家庭内のジェンダー・バイアスは全く感じられず(事例28)」のように長女だったのでむしろより良い教育機会を与えてくれたというケースもあった。

③職業選択への影響

彼女らが専門職に至った経緯としては、「(事例1) アボジ【父】の考えは、その時代は、私たちの周囲にも優秀な先輩がたくさんいらっしゃって、いろんな大学に入ったけども、結局は、仕事がなくって、商売をするしかない。在日は、手に職をつけないといけない、というようなことをよく言ってましたね。それだったら、医学部か法学部しかないとかいって、常に親が言ってました。」「(事例14) その先生【朝鮮高校の英語先生】の女姉妹が全部薬剤師やってん。男は歯医者さんやったかな。そのときに、私は何になりたいかっていうたら、一人でも食べていける職業、っていうて。・・・オモニ【母】と喧嘩して、お金のことでいつも喧嘩して、殴られても・・・そういうの、見てるから、も一、これが嫌っていうのがすごいあって。だからね、一人でも生きていける職業っていうたときに、その先生が、生野では、男は医者で、女は薬剤師、って言いやってん。薬剤師が何する仕事か何にも知らないけど、私はなるわ、って。」

面接参加者から「手に職をつけないと」という表現を何回も聞いた。公務員などは国籍要件によってなれない。日本の企業には企業内の人事戦略によって就業できない時代に、差別されず

に経済的な安定を得るためには男子は医師、女子は薬剤師という言葉が在日コリアンの中では謳われたという。勉強が少しでもできる多くの在日コリアンの子どもたちはこの言葉を耳にしながらか成長した。(事例1)は父親の影響で、(事例14)は高校の先生の影響で在日コリアンの憧れの職への途を進んだ。

「(事例8)【高校】3年生の時かな、、そのときにすごく心配してくれてた国語の先生が、在日で司法書士をやっておじさんを紹介してくれて、わざわざ職員室に呼んでくれて。こんなおっちゃん、おるよって。それで、司法書士になろうと思うてね、そのおじさんと同じように。生野区役所の前でね、司法書士してはって。帰化でも何でも。“私は、何でもしますでー”言うてはって。そんな仕事が出来たらいいかなって、法学部に入ったんです。・・・【弁護士】なられへんから。その当時。司法書士やったらなれるというのを知ったんです。そのおじさんのおかげで。・・・大学に入ってもうすぐ2年年生になる頃に・・・新聞記事【在日コリアン第1号弁護士となった金敬得さんの訴訟事件】見て、ものすごいショックを受けたんです。なれるもんばかり探してたけど、このお兄さんは、なれないところをね、これはおかしいじゃないか、言うてね、自分で壁を越えてるから、私と違うわ、ってすごいショックを受けて。いやー、私も司法試験、受けてみようって思ったことが、運のつきだったんです。」「(事例28)私は、【大学】金融論のゼミに入っていて、そのゼミに入ったら、就職率100パーセント。金融関係に入れるんですよ。・・・【日本の女子学生も】ものすごい少なかった。学年に20人以下、、金儲けしようと思って。銀行に入ろうと思うてね、、その金融論に入れば、都市銀行に確実に入れるんですよ。その先生のゼミの教え子が全部入ってるからなんです。人事を押さえてますよね。〇〇銀行、いまの〇〇〇銀行は、全部〇

〇〇【大学】系ですわ。必死で勉強して、クラスでもトップやったし、・・・その先生が頭下げて、“ごめん、朝鮮人は、紹介でけない”って言うんですよ。・・・日本の女性差別もありましたけど、当時、バブル寸前ですから、女性陣でさえも、何らかの形で就職できたんですよ。学歴があれば。したがって、日本女性であれば、どっかに就職できたと思います。私の場合は国籍差別ですね。】

(事例8)は在日コリアン女性弁護士第2号になるが、高校の先生の影響で法学部に進んだ。大学2年のとき在日コリアン金敬得さんが訴訟を起こし、弁護士になる道が開かれ、専門職への道を歩んだ。大学卒業後に女子学生がどんどん就職が決まっていくのを見て一時期司法試験をやめて他の仕事を探したが、名門の国立大学を卒業したにも関わらず就職先がなかったという。一方、(事例28)も京都にある有名な私立大学出身であるが、卒業後、彼女だけが就職できないというつらい経験をし、アメリカ留学を決心した。彼女は、当時、自分が就職できなかったのは就職差別、国籍差別であったと断言した。彼女は、卒業後、留学準備金を集めるために英語塾を開き初仕事をスタートしたが、現在は大学教授として活躍している。この二つの事例は、当時、在日コリアン女性の就業がいかに厳しいものであったかを物語る。

専門職の場合、親の教育に対する関心が非常に高い。社会的・経済的な苦しさを経験した親は、子どもたちに教育をつけることによって貧困と差別を引き継がせないという必死な気持ちで子どもを支えた。彼女らは親の教育への関心と、経済的支援によって社会・経済的に安定した専門職をつかんだ。

2) 地元中小企業職の証言から見る職業選択に関する行動戦略と初職への入職経路

地元にある中小企業に事務職として初入職し

た経験を持つケースを取り上げ、それに至った経路を分析していく。このグループはすべて高卒であり、初職時にはすべてが通名を使っていた。例えば、朝鮮高校を出て在日企業（事例15）に勤めても通名で働いた。現在、彼女らの仕事は、就活中、アルバイト、起業準備中、非常勤講師であり、1人は日本人男性と同居中、2人は離婚しており自ら生計を立てなければならず、社会・経済的に不安定な状況である。彼女らはそもそも経済循環に弱い地元の中小企業に事務職として入職したが、その証言から入職経路をうかがってみよう。このグループが大学に進学できなかったのは、両親のジェンダー・バイアスと家庭の経済的事情によるものであったが、その二つの理由別に分けて分析する。

①家庭のジェンダー・バイアス意識が職業選択に影響を及ぼしたケース

「(事例6) 教育の中で、家族の中では個人というのは一切なかった。・・・高校2年生のときにフランス語習いたいって言ったんです。父に。ええ格好のために習うんやろ、あかんって、言われたんですよ。フランス語とか、おしゃれで習うんだらう。ダメって言われて、ことごとく。それと花嫁修行になる習い事は良いけど、それ以外は全部、ダメだったんですね。・・・

小さいときから女は結婚して子どもを産むのが仕事、と言われて育った。父親がそうですけど、母も多分そう思って、自分も育てきただろうし、家自体がそういうふうな考え方。周りもそうですし。・・・大阪の朝鮮高校を出ていきますけど、そこを出ると就職がないんですね。私らの時、大阪朝鮮高校は高校の卒業の資格がなかった。今はあるんですけど。その会社【初職先】は父親がプラスチックの原料の着色の工場を操業していたので、その関係で就職をさせてもらったという感じだったんですね。」「(事例15) 高校を卒業したときに、朝高卒業って書

いて、面接に行ったら、“それ、何の学校？”って言われて。高級学校いうてね、朝鮮高級学校、“それ、どこの学校？”とか言われたりして。でもまあ、それでも、その履歴書で、あちこち面接に行って。たまたま在日韓国人のところに面接に行って、そこで2年間ぐらいい働いたことはあります。・・・朝高出て、誇りとまではいかないけど、普通と思ってたので、履歴書を書いていったら、なんか、ことあるごとに、“どこの学校？”とか、断られたんで。認められてない学校だし。」「(事例6) 私たちの世代というのは、一般企業に勤めることが、まず出来なかったんですね。そうすると、やっぱり、親戚の人がしている仕事というのは、パチンコ屋さんだったり、金融だったりとか、あと、飲食業であったりとか、職種はすごく限られていたんです。あとは、他の人たちがあまりしないような産業廃棄物の仕事とか、っていうその・・・それを親たちがしてて、親戚の人がしてて、そういうところになら、お勤めが出来なかった。いろんなことがあって。でも、私から見たら、すごく能力なところがあって、本当にすごい、ある世界にいけば、才能を発揮するんだらうなという人たちも、結局は飲食業に入ったり、そういうとこばかりだったの。」と。

(事例6) と (事例15) は姉妹で、2人の父親はプラスチック関係の工場を営んでいたのが経済的に困ることなく育った。彼女たちは初職入職時に地元中小企業を選んだ要因を、両親のジェンダー・バイアス意識と朝鮮学校出身であるとする。経済的に余裕がある家庭だったにも関わらず、「フランス語はええ格好のために習おうとする」として父親に反対される。しかし、花嫁修行になる習い事は良いという父親のジェンダー意識に対して心の中では常に疑問を持ち続けた。彼女らの両親は、女は結婚して、子どもを生むのが仕事という意識を持っていて、同じ在日コリアンと結婚するには朝鮮高校

が良いと考えたという。彼女たちは、朝鮮高校の出身ということで就職時に不利な立場になったと言いつつ、朝鮮学校が嫌いではない。むしろ朝鮮学校が好きで朝鮮学校の友達との繋がりも大切にしているという。その反面、日本社会ではつらい思いをさせられたと語った。(事例6)は、勉強ができてでもろくな仕事に就けないという社会的な不信感が深かった。家庭の経済的条件は専門職グループに劣らなかったが、専門職で見られる両親の子どもに対する教育への関心や社会的上昇に対する本人の意思が見られず、親の言うとおりに入職したケースであった。

②家庭の経済的困難が職業選択に影響を及ぼしたケース

(事例17と)と(事例19)は、子どものときの厳しい家庭経済事情によって大学への進学を諦めざるを得なかったケースである。(事例17)の父親はアパレル関係の企業に勤めていたが、彼女が高校生のとき離婚した。「(事例17)母親が働いてましたし、私たちも高校生だったから、アルバイトして。そんな裕福な家庭じゃなかったんで・・・学校も公立やったから、自分でアルバイトして、学費、出して、高校、卒業したという感じです。・・・あまり教育熱心な親ではなかったんで、親から、教えられたという記憶は正直ないんですよ。」彼女は高校卒業後に就職に有利な資格を取るためにコンピューター専門学校に入学した。しかし、「(事例17)やっぱり金銭的にしんどくなって、続けることができなかつたから、やっぱり途中でやめちゃって。そっからは普通に募集してる会社に、自分で履歴書とかを出して、それで就職とかしました。だから、そんな大きい会社じゃなくて、普通の中小企業みたいな感じで。」と初入職の経験を語る。(事例19)のケースはもっと困難な経済事情で生活保護を受けた家庭であった。「(事例19)父親は建設作業員、土方の仕事でずっとや

ってて、母親は金属加工業のプレスっていうプレス工をずっとやっていて。それが私小学校6年生の時に、母親が脳血栓で倒れたんですよ。で、半年入院して、半身不随じゃないですか。びっこ引いて歩くような状況で、働けないので、それで生活保護の生活になってね。」「(事例19)勉強したいし、大学行ったら、なんか違う世界。なんか両親と同じように、単純労働で低賃金長時間労働しなくてすむような世界、自分もそういう世界に入れるんじゃないかな。やっぱり勉強しないといけないわと思ったんですよ。・・・仕方なくそれ【商業高校】行って、そのまま就職したんですけどね。その時も在日行けるところって限られてて、・・・在日の人は就職もちょっと難しいから、今まで行ったケースのところにいくのが無難だと思うって【先生に】言われて普通の会社に行ったんですよ。・・・私はどっちかという、上昇志向だったんで、学歴も高くしたいと思って、【就職後】貯金して、まだ大学に行きたいという夢は捨ててなかったんで、機会があれば、大学に行こうと思ってたんですよ。私その時英会話の学校に行っていて、アメリカにすごく憧れてて、アメリカに行ったら、自分は普通に見られて、そんななんかいろんなこと言われるんじゃないんじゃないかなと思って、アメリカに行きたいという夢が心の支えになってのかもしれないですけど。留学するという」。

(事例17)は専門学校に行って就職に有利な資格を取得しようと試みた。(事例19)は家計のために地元の中小企業に就職した後も希望を捨てずに36歳で大学に入り、その後、大学院に進み、韓国留学も経験する。以上の事例は上昇志向意識が強く、家庭の経済条件さえよかったら希望通りのより高い教育を受けて自ら目指す道を歩んだかも知れない。

3) 民族運動団体職の証言からみる職業選択に関する行動戦略と初職への入職経路

①子どもの頃の家庭事情

「(事例22) 家かって、言ったら、廃品回収、資源再生的な仕事をしてるわけですよ。汚いですね。そういう自分の生活圏の中にあるものが、すべて汚いですし、理解ができないものがありますし、できれば避けたいようなものであった。それがイコール朝鮮だったわけです、自分の意識の中でね。・・・実際、働いていたのは母親なんです。仕事をしていたのは。父親は、商売で借金は膨らんでくるし、どうしたらいいかわからないしっていうことがあるから、当然、荒れますよね。酒を飲みますよね。体を壊しますよね。精神的に病みますよね。このパターンですよ、完璧に。結局、それやけど、四人の子どもがいるから、母親は必死になって働いて、子どもたちも、だから、家の仕事を手伝わされる。」「(事例23) すごくアボジ【父】のこと、嫌いで、働かないから。オモニ【母】だけが朝から晩まで一生懸命働いて、アボジ【父】は全然働かないで、博打とか、競馬とか、マージャンとか、あと、お酒を飲む姿だけしか。・・・一生懸命働く姿っていうのが、私が高校ぐらいまではほとんどなかったの。」

②親の教育に対する関心とジェンダー意識

「(事例22) 母親は自分が学校に行っていないのがあるから、自分が受けた苦しみを味あわせたくないのがあるから、なんしか、勉強だけは絶対せなあかんというのがあったんです。・・・教育がなかったらどうなるかというのは、母親は、生野で嫌なぐらい見えてくるわけですよ。教育がないと人生を生けていけない。とくに女の子の場合は闇に進んでいくということを母親は知ってますから、そうはさせてはならないっていうのがあるから、だから、勉強だけは、というのがあったんですよ。」

「(事例23) オモニ【母】のほうが断然強くて、ものすごく高学歴志向みたいなのがあって、いわゆる教育ママみたいな部分があって、【兄弟】三人とも大学に入れるというのは、小さいときから、すごくありました。だから、勉強だけは、一生懸命やらなあかんというのは、子どもらに対して、すごくずっと言っていました。・・・本当に教育だけがきつとオモニ【母】の支えやったと思うんですけど。」

「(事例21) うち、息子がおったら事情が変わったと思う。妹と二人やったから。私の世代なんか、弟だけに大学に行くお金の用意をしたとか、おまえは高校だけでいいとか、そんなひどい話をいっぱい聞きましたけど。うちは女二人やったからラッキーやったかな。」「(事例22) なんしか勉強しなさいと。でも、姉が大学に入るときとか、私が大学に入るときには、父親がいい顔をしませんでしたよ、やっぱり。要するに大学までというのがあるわけですよ。女の子に対しては。」「(事例23) 愛情は、もちろん私にも姉にも注いでくれて、それは本当に感謝してるけども、二人は三人の子どもに、とても愛情を注いでくれたので。ときどき出し方を間違ってたけども、すごく愛情を受けたと思っているから、その点ではとても感謝してるけども。でも、きつと一番好きやったんは弟やったと思います。」

このグループは3人とも大卒の高学歴で、大学のとき民族系サークルに入って活動したが、卒業後も活動の引き続きで民族運動団体の指導員として初職を経験したケースである。子どもの頃の家庭事情を見ると、母が働いて生計を立てるなど裕福とはいえない状況であったが、両親の子どもの教育に対する関心が高かった。とりわけ、母親の生活力と教育に対する意思と執念が強いことがうかがえた。家庭の経済事情は良いとはいえないものの生計を担うような状況でもなかったの、ある意味どのグループより

も自由にやりたいことができたケースとも言えよう。家庭内でのジェンダーバイアスもそれほど深く感じることはなかった。

③民族運動との繋がり

「(事例21) 私の世代だから、いやほど朝鮮人差別ってあったじゃないですか。露骨に。地域社会だとか学校でね。そうすると、自分がその対象だということが小学校入るか入らないかの時にわかりますよね。【出自】 隠し続ける生活があって、で、思春期にね、なんでこんなことをやりつづけなきゃいけないのかとか。・・・大学に入ったら、サークルに誘われて。やっぱり仲間を求めて行きますやん。そしたら、高校時代の友達がいっぱい本名でいきなりお互いに登場して。なんかね、えーって、お互いに。わたし、忘れませんわ。本当に。何人かそれで出会って。」「(事例22) 自分の出自を否定していたのは、物心つく頃からなんで。真剣に悩みだしたのは、少しずつ、社会に出て、自分がどう生きていくのかということを考え出したのは、だいたい高校ぐらいからですよ。・・・【姉】大学の合格発表を見に行ってくれたんですね。そのときに、姉のほうが、朝鮮人のことをやるサークルはないですかということを聞いたみたいですよ、サークルの中で。じゃあ、こういうのがありますよ、ということを教えてもらって、そのことを姉が私に教えてくれはったんです。研究会と出会って。・・・大学時代、研究会しかしてません。ほんまに、それしかしてませんもん。運動しかしてません」「(事例23) それは空気を吸うように、韓国・朝鮮人に対する差別意識は、社会意識としてあったので、自分の中では、絶対、自分が韓国・朝鮮人やということ、明らかにすると、差別されるというふうにわかったの、それは徹底的に隠しました。・・・自主的に大学の昼休みに集まって、在日朝鮮人問題のことを勉強してる集まりがあるから、そ

こに来えへんかって誘ってくれて、そこに行っただですよ。そしたら、在日朝鮮人教育のことを考えてるサークルの人たち、じつはその人たちが指導してたやね。そこで自分の生い立ちや名前や、自分の生活のことを話せるようになって、どんどんお近づきになって、結局、八尾のトッカビに行って、で、【本名に】変えました。」

このグループは子どもの時の経済状況は良いとは言えないが両親、とりわけ母親の教育に対する執念によって大学にまで進学することになった。高校のときには、日本政府の同和政策の一環として学校で在日コリアンの本名宣言が進められていた。彼女たちは通名と本名のうちどっちを使うべきかについて悩まされた。卒業式で本名宣言をする人もいればそのまま通名で卒業する人もいた。民族運動が高まっていた時期でもあるので大学に入って民族系サークルに出会ってから民族意識が表面化したケースである。

④職業選択への影響と初職への入職経路

「(事例22) 進路はね、すごく悩みましたね。家もそういう状態だったし、闇の時代でしたね、高校。自分の進路を、きちんと考えたくない、見たくない、正面に据えて置きたくない、という時代でしたね。実際、自分が出会った在日で、安定した仕事についてる人はいないんですもん。ロールモデルが全然ないんですよ。本当に、不安定な土方をやったりとか、水商売をやったりとか、そういうモデルしかないんですもん。自分の知ってる在日というのは。零細なヘップサンダルをやったりだとか、廃品回収をやったりとか、その世界しか知らないわけですから、そういう在日しか知らないわけですから、在日の将来とか、職業とかって言っても、そこにしか姿を見出せないわけですよ」「(事例23) 高校2年のときに大阪府立の学校に通っていたんですけど、たまたまその学校に朝鮮奨学会のソン

センニム【先生】が、講演に来てくれて。・・・学校の中であつたけども、日本人の振りをして聞きに行って、そのときに初めてソンセンニム【先生】が、何年前から、大阪府と大阪市の教職員の試験を韓国籍でも受けれるようになったと、いう話を聞いて。それまではオモニ【母】は、絶対、公務員なんかになられへんし、民間の会社は就職差別があつて、日本人と差をつけられるから無理で、だから、手に職をつけて、医者か薬剤師か弁護士になるしかないって。だから、そういうふうな大学に行かないと生きる道はないんやって、散々言うてたんやけども。でも2年になったら、自分はそんな医学部や薬学部に行けるような頭はないし、ましてやそんな法学部も無理やし、どうしよと思うてたときに、たまたまそのソンセンニム【先生】の話を聞いて、教師にはなれるんやっていうのを聞いて、ほんで、すぐに教育大学を選びました。・・・大学を卒業して、結局、民間の企業はどこにも行かずに、行けずに。八尾のトッカピ子ども会っていうね、専従の・・・卒業して、すぐ。わたし、いちばんの、自分たち多くの在日がそうであつたように、直接差別を経験したし、それだけじゃなくて、進路が非常に閉ざされてるっていう切実な状況があつて。」「(事例21) 大学4年生の時に、課外活動でね、部落の予算を使って、チョソン【朝鮮】子どもの会、友の会か、なにか、課外活動があつたんですよ。学校に通っている子どもたちのね。その民族講師で、週1回の枠があつて。・・・簡単な韓国語とか、歴史、教えたらいえから、って、行つたんですよ。・・・むちゃくちゃやっつてん、子どもたち。いちばん、荒れてる時期やっつて、言われてたんですけど、学校の中が大変で。先生たちが走りまわつてはつて。めっちゃめっちゃの先頭の何人かが朝鮮人で。・・・まあ、いろいろ話を聞くなかで。たとえば先生がね、この子の親はこんな生活をしてきて。いろいろ聞いた

ら・・・なんか結局、社会が一番の問題で、本人たちの責任だけを詰めてても、何も変われへんのかなあ、っていう、やっぱり、確信というか。今、荒れてて、今、すさんでるこの子らのことをきちんと向かい合えへんかつたら、説得力ないんちゃうかなつと思つたんですよ。ただまあ、自分も、21歳の、社会に出たこともない子が考えることやから、限界はあつたんですけど。それがあつて、トッカピ子ども会と出会つて。それも先生がね、そこの指導員の人たちが朝鮮語、ぜんぜんでけへんから、運動しているのにな。・・・週一回かな、そこの若者たちにね、朝鮮語の先生として、初め、行つたんですよ。それがきっかけでズルズルとはまつて。』

いずれも高校の時から自分の民族的な立場を良く知っていて将来の職業について悩んでいた。(事例22) は在日コリアンの中で将来行く道を提示してくれるロールモデルがないという民族集団に対するネガティブな意識をもっていた。当時、在日コリアンの中で安定した職は前述した通り医師か薬剤師だけであり、勉強がよくできたごく一部の人だけがその職をつかんだ。普通の在日コリアン、とりわけ普通の在日コリアン女性にはロールモデルにするような職業に就いている人を見つけることは不可能に近い時代であった。日本社会の大部分の公職が国籍条項制限によって、また大企業の人事制度によって就職が閉鎖されていたため、普通の在日コリアン女性が選択できる職業とは、地元にある同じ民族系の中小企業の事務職か飲食店しかなかった、とインタビュー参加者の多くが口をそろえる。大学のとき民族意識に目覚めた彼女たちが選択できる道は、卒業後にも民族運動が続けられる民族運動団体職への入職だったかも知れない。

4) 総連系学校職の証言からみる職業選択に関する行動戦略と初職への入職経路

このグループも学歴は高い。4人のうち、3人は大卒で一人が高卒である。このグループの二人は小学校から高校まで、二人は大学まで朝鮮学校に通い、卒業後にはそのまま朝鮮学校の教師になったケースである。ある意味、日本で生まれ、日本で教育を受けたにも関わらず日本社会をよく知らないケースである。日本社会と遮断された民族組織の中で教育を受け、同じ民族の友達と付き合い、同じ民族系の組織に就職したので日本社会と常に接してきた在日コリアンと違って日本社会の差別を感じることはなかったと証言した。

①子どもの頃の家庭経済事情

「(事例24) 物心ついたときは、親がアパート、持ってて、そこを日本の人たちに貸してて、事務員さんがいたり、そんなだったから、そこのお嬢ちゃんって感じやったし。【父は総連系】学校建設の建設委員長をしたり、支部の建設委員長をしたり、その当時は、家庭を顧みずという感じで、一生懸命、やってはったよ。…生活は困らないようにして、…その前は、鉄工所みたいな。鉄の…いろいろ商売をして。地盤が出来たら総連の活動を。」(事例25) うちのアボジ【父】がね。私が生まれる前までやけど、小学校の先生してたんですよ。小学校の教員してて、ずっとウリハッキョ【朝鮮学校】いてたんですけど、生活ができないからいうことで、日本の会社に入りました。」彼女の父親は朝鮮学校をやめた後も朝鮮学校に対する愛情は深かった。「(事例26) 私が就学する1年生になる時に、家で金属関係の工場をし始めました。…工場というほどじゃないんですけども、作業場が半分あって、そこで機械を。…母が手伝って。…よくある下請けというんでしょうか。お父さん、よう働いてたよ。働いて

たけど、夫婦喧嘩、いつもしてたな。それ覚えてますわ。…やっぱり生活が苦しいからちゃうん」

このグループは子どもの頃の経済事情は富裕層から貧困層まで極端に分かれる。(事例24)はお嬢さんといわれるほど家庭の経済事情は裕福であったが、(事例26)は貧困で生活に苦しい両親がよく喧嘩した貧しい家庭で育っていた。

②親の教育に関する関心とジェンダー意識

「(事例24) 総連に入ってたから、それで、寄付とかもしてたから、【朝鮮学校】入れたんじゃないかな。私は正直行きたくなかったけど、幼稚園の友達と別れるから。でも、無理矢理って感じで。…私は、普通の日本の学校に行かせてくれたほうが、いろいろ自分の道が開けて良かったなあとと思っています。中学校ぐらいまでは、ウリハッキョ【朝鮮学校】もいいけども、高校、大学は自分の資格とか職業的なことを思うと、そういうふうに行かせてくれたほうが。行きたいって言ったけどもね、ダメだって言われて、行けなかった。…選択肢がそこしかなかった。…父親なんかは、嫁にいかないと女は何の価値もないとしょっちゅう言ってたし。女4人に男1人なんやね、きょうだいが。相続は全部、男の子にさせるとか、すごい儒教的というか、古いところがあって。ただ、教育の面は、平等になって、父親は言ってる。結構、自由にさせてくれてて、そんな面はいい親やったかと思うけれども、でも、ウリハッキョ【朝鮮学校】に行かせたのというのは儒教的であったのと違うかな。」(事例27) 高校卒業したら、とにかく受験というものを知らなく高校生まで【朝鮮学校】行ってますので、漠然としかないんですけど。両親の意向は、大学まで行ってほしいと。強調はされたことはありませんが、なんとなく雰囲気的にはありまして…学校

の中では、できたほうに入ったんですけども、・・・父は昔ながらの、私が女子なので、いずれはお嫁に行って無難におさまればそれでいいし。・・・勉強したいものがあつたら、それはそれで応援してあげるしと。とてもやわらかかったんですけども。」

この二つのケースでは、親のジェンダー・バイアス意識が感じられる。大学に行ってほしいと言いながら、良い結婚相手を見つけるための条件を備えるくらいの教育をさせたいという気持ちがあがえる。現在、(事例24)は、離婚してフリーの韓国語講師と通訳などをしながら大学院の博士課程に在学中である。(事例27)は、未婚でフリーの韓国語講師とピアノレッスンをしている。このケースの親は、娘が勉強ができてよい職に就くよりむしろ良い相手と結婚して安定的に暮らすことを望んだがその望み通りにはなっていない。

③職業選択への影響と初職への入職経路

「(事例24)【朝鮮大学】学校、卒業したら、そのときはチョジギビダ【組織です】って組織に配属するだけ。どこどこ行きなさい。命令よ。そこで就職が決まるわけよ。勝手に。その当時は。〇〇朝鮮高校。」「(事例25) なんかね。子どもが好きだったんで、保母さんという選択肢やったんですけど。で、自分の中では、ずっと朝鮮学校出て、日本の学校の先生というのは頭になかったんで。で、私らの時代は、高校出てすぐ朝鮮学校の幼稚園の先生はできたんですよ。大学でなくても。だから、それで選んでっていうのもありましたけど。」「(事例26) もともと日本の学校に行ってたんです。1年、2年のときに朝鮮学校に行ってる友だちらと仲良くなって、“うちの学校においでや”っていうことになって、学校に行つて、そこのチョソンハッキョ【朝鮮学校】の先生が、“おいでえや”。その言葉が温かく感じて、そこから行つたんで

すよ。・・・ハンゲルはものすごい好きやったんです。・・・高校のときの文法の先生、朝高の。その先生が文法を教えるときの韓国語の流暢。ほんで、韓国語が好きやというのを感じたし、その人を見て、教師なろうと決心したんです。・・・大学卒業して、朝鮮学校の先生になりはるねんね。自分の出身校、尼崎を希望したんです。」「(事例27)【芸術大学】大学出てすぐに、・・・朝鮮学校の音楽の先生が足りないよ。今、3か所が空いてると。とにかく埋めないよ、新学期が始まらないんだということで、とにかくどこでもいいから、とりあえず行つてほしいんだというのが、たぶんその年だったら、そんなんはたまたまだったと思うんですけど、その年に当たつたので、予期せず音楽の講師に行くことになったんです。非常勤で。小学校でした。それと、ピアノの個人レッスンを並行にしたのが職業の始まりです。」

(事例24)はジェンダー・バイアス意識、民族意識が強い父親によって非自発的に朝鮮学校に入り、卒業後は、その組織の学校にそのまま非自発的に入職したケースである。彼女は組織の中の父親の立場を理解し、自分の人間的な欲求と社会の期待役割に混乱するが結局は父の期待に応じる生き方を選んでた。一方、他方の2人は、子供の頃の夢を求めて自発的に総連学校に入ったケースである。(事例25)は、幼稚園の先生が夢であったが、朝鮮幼稚園の先生として初職を経験した。(事例26)は、日本の学校に入ったが自ら朝鮮学校へ転校した。朝鮮学校に転校した彼女は韓国語と韓国語を流暢に話す先生に憧れ教師になることを決心した。朝鮮大学卒業後には、母校である朝鮮中学校の教師として初職を経験した。この2人は夢を叶えたケースである。(事例27)は、父親が朝鮮学校の出身で両親とも総連の青年活動に参加した経験を持っている。父親の意思によって朝鮮学校へ行くことになったが、音楽が好きだったので

大学からは日本の芸術大学に行った。そのとき、民族集団から初めて日本社会に出るので自分というものを絶対に曲げてはいけないと思ひ必要以上に構えたが、日本の大学に行くと普通の世界と変わらなかったと証言した。

「(事例27) 必要以上に構えてしまうんです。もっとリラックスしてもよかったんですけども、一人で飛び込んで行くという、温室育ちみたいなもんですから。特に、世間では、差別云々のなんとなくは聞いているんだけど、全く無縁の世界で、ずっと育ってますので、そういったものをこう必要以上に意識したり、自分というものを絶対曲げてはいけないんだとか。・・・また、名前からみんなに一回一回説明していかないとはいけませんね。毎回お友達になる人の度に。邪魔くさいことなんですけども。・・・常に日本人の中では、自分はフル回転しとかなないと、ついていけないというような思いがあったんです。・・・常に緊張しておかないといけないという。で、行ったら、そんなユルユルの学校だったんで、ちょっと抜けたんです。こんなんでいいのかなっていう。そっからは、普通に。」

まとめ

在日コリアンミドル女性を対象にインタビューを行い、彼女たちが学校を卒業し初めて職業を選択し、入職する際に、誰のどのような影響を受け、いかなる経路で入職したかについて考察した。その際、専門職、地元中小企業職、民族運動団体職、総連系学校職にわけて、それぞれの子どもの頃の家庭の経済事情、両親の教育への関心とジェンダー意識、職業選択に影響を与えた要因などの証言を抽出し、初職入職への行動戦略とその経路を明らかにした。

分析過程で遭遇したのはそれぞれの個人の経験を一括して説明できないという難問であっ

た。社会的には同じ環境におかれていても家庭の経済事情、両親の教育に対する関心、ジェンダー意識、民族意識などの個別的な要因によって職業選択に際しての当事者の意識や行動戦略、初職への入職経路が多様化していた。さらに同じ職業の中でも具体的な経験内容の多様化であったが、彼女たちの行動戦略にもっとも影響を与えたのは両親の意識であったように思われる。

前述したように、Gottfredson,L.S. (1981)は「子供は自分の性、人種を認識するとともに職業が男性的か女性的かという判断を行うようになり、自分の性に合致するような職業を好む」と述べているが、専門職の場合、両親の子どもの教育に対する関心や、ジェンダー平等意識が高く、彼女たちは一人の人間として育てられた結果、男性職とされる医師、弁護士、大学教授の職をつかんでいた。彼女たちは男か女かいう性別より兄弟の中で一番上(長女)という責任感、また兄弟の中で「できる子」を支援するという親の意識のもとでより高い関心と教育を受けて育てられた。このケースは社会や家庭でジェンダー・バイアスをなくし性別を超えた一人の人間として育てられると女性の社会的地位が向上することを示唆している。

地元中小企業の事務職を見ると、大学に進学できなかった要因としては、両親のジェンダー・バイアス意識と家庭の経済事情に分かれた。経済的困窮による進学の断念は男女を問わずよくあることである。しかし、(事例6)と(事例15)の場合は、家庭が経済的に安定していて本人の上昇意識があるにもかかわらず両親のジェンダー・バイアス意識によって能力の啓発が塞がり、花嫁修行だけを薦められる。(事例6)は「私自身の中ではね、女やからとか、男やからとか、この差はなんなんやろってずうーっと小さいながらも思い続けてきた思いはあるんですね。私にも何か出来るはずなのに、なんでや

るって、ずうーっとクエッションマークで来てたんです。」と家庭のジェンダー・バイアスに疑問を持ち続けていたが、それにもかかわらず厳格な父親に逆らうことができなかった。両親のジェンダー・バイアス意識が女性の職業選択の道を遮る典型的な事例といえる。

前述で、エスニック・マイノリティー女性は人間的な欲求とエスニック集団の期待役割の間でエスニックとして、また女性としてどのように生きるべきか、どのように行動するべきかについて混乱を引き起こされると述べたが、これにもっとも当てはまるグループが民族運動団体職と総連系学校職である。とりわけ、民族運動団体職は、中学校までは在日コリアンであることを隠し続けてきたが、高校の時から自分は日本の社会でどのように生きるべきかについて悩み続けた。大学に入って民族系運動サークルと出会って民族意識に目覚め、自分の欲求より民族のために生きることに惜しまない。

民族運動団体職が大学のとき自ら民族運動に関わった延長線上で初職への入職を果たしているに対して、総連系学校職は、朝鮮学校に入ったときから初職への入職が決まっていたかもしれない。ある人は親によって無理やり、ある人は自らの選択で朝鮮学校に入ったが、卒業後はいずれも組織によって勤務先が命じられる。(事例24)の「卒業したらチョジギビダ【組織です】。組織が配属するだけ。命令よ。そこで就職が決まるわけよ」という証言から職業選択の余地がなかったことが分かる。

以上の分析によって、エスニック・マイノリティー女性の職業選択に関する行動戦略と初職への入職は、主流社会及びエスニック集団の社会的環境と個々人の家庭内の環境によって大きく規定されてきたことが明らかになった。この研究の結果は、在日コリアンミドル女性の経験や行為戦略が既存のジェンダー研究、またエスニック・マイノリティー研究で指摘されている

よりもっと多様化していた。在日コリアン女性を一つの同質的な集団と看做して定型化することは危険なアプローチである。在日コリアン女性を理解するためには、質的研究がさらに蓄積される必要があり、在日コリアン女性の多様な行動戦略について多文化主義のレベルで再解釈する新しいアプローチを必要とするように思われる。本稿のインタビュー参加者は、初職への入職からすでに約20年から30年のときが流れている。インタビュー参加者30人のうち、初職時の職場にそのまま働き続けている人は一人もいない。とはいえ、仕事をやめている人も一人もいない。彼女たちは、これまで1回から6回以上の転職を経験している。そこで、今回は彼女たちの職業移動に注目して考察してみたい。

参考文献

- 李洙任(訳)(2008)「在日コリアン系企業家」『経済学論集(国際学特集)』Vol.47 No. 5.
- 大沢真理(1993)『企業中心社会を超えて』時事通信社
- 尾嶋史章(1995)「女性の性役割意識の変動とその要因」尾嶋史章編『ジェンダーと階層意識』SSM調査研究会
- 川崎のハルモニ・ハラボシと結ぶ2000人ネットワーク生活史聞き取り・編集委員会編(2009)『在日コリアン女性20人の軌跡』明石書店
- 金明秀(1995-a)「在日韓国人の学歴と職業」『年報人間科学』第16号
- 金明秀(1995-b)「自営業と職業移動」1995年SSM調査シリーズ3『社会移動とキャリア分析』SSM調査研究会、大阪大学ホームページ
- 金明秀(2003)「意識調査からみた21世紀へのビジョン」徐龍達編『21世紀韓朝鮮人の共生ビジョン』日本評論社
- 社団法人北海道ウタリ協会札幌支部／部落解放

- 同盟中央女性対策部・アプロ女性実態調査プロジェクト・反差別国際運動日本委員会編集（2007）『立ち上がりつながるマイノリティ女性』解放出版社
- 永野慎一郎編（2010）『韓国の経済発展と在日韓国企業人の役割』岩波書店
- 仲原良二（1993）『在日韓国・朝鮮人の就職差別と国籍条項』明石書店
- 成田孝三（1995）「世界都市におけるエスニックマイノリティへの視点」『経済地理年報』41（4）
- 在日韓国・朝鮮人問題学習センター（1989）『マッパラム（向かい風）』
- 森永康子（2001）『女性の就労行動と仕事に関する価値観』風間書房
- 森木和美（1989）「在日韓国・朝鮮人および中国人の職業的地位形成過程の研究」『関西学院大学社会学部紀要』第60号
- 渡辺勉（1995）「戦後日本の入職経路の分析」『1995年SSM調査シリーズ3：社会移動とキャリア分析』SSM調査研究会、大阪大学ホームページ
- Astin, H.S. (1984). The meaning of work in women's lives: A sociopsychological model of career choice and work behavior. *Counseling Psychologist*, 12.
- Gottfredson, L.S. (1981). Circumscription and compromise: A developmental theory of occupational aspirations. *Journal of Counseling Psychology Monograph*, 28.
- 厚生労働省「平成22年版 働く女性の実情」平成23年5月20日
- 統計庁「平成17年国勢調査」
- 法務省「登録外国人統計」
- 「朝日新聞」1974年6月19日
- 本稿で使用しているインタビュー調査は、神戸学院大学の研究助成金で同大学の神原文子教授を代表として、同大学の五十嵐真子教授、ヒューライツ大阪の朴君愛研究員、そして筆者の4人が共同で行ったものである。本調査は、日本社会における最大のエスニック集団で、朝鮮半島にルーツを持つと自認する在日コリアン2-3世女性の現状と課題について実態調査やインタビュー記録が皆無に近いので、その空白を埋めるという目的で始まった。具体的には、現在ミドルに至った在日コリアン2-3世女性たちの生活・就労・意識に潜む被差別や社会的排除の実態に迫り、問題を提起することを目指した。調査結果はそれぞれの分野で論文として公開することにした。神戸学院大学及び快くインタビューに協力してくださった方々に、この紙面を借りて感謝の意をお伝えしたい。